祖母が残してくれた畑からはリンゴの果樹園、田んぼ、海が見える。

どこまでも空が高い秋晴れの日。高台の畑に立つと眼下には黄金色の田んぼが連なり、その先には空と同じ色をした海が広がっている。胡麻を散らしたような黒い点々は海に浮かぶ養殖イカダだ。潮風が生姜畑を通り抜けると、緑色の葉っぱがサラサラと音を立て、爽やかな新生姜の香りが鼻腔をくすぐる。菊地康智（やすとも）さん（36）は「この場所、気持ちいいですよね」と微笑んだ。

暴走

康智さんは千葉で生まれ育った。みんなのボール遊びの輪には入らず、裏庭でコンクリートブロックをひっくり返してうごめく虫を眺めるのに熱中するような、ちょっと変わった子どもだった。母の実家が岩手県陸前高田市にあり、長期休みには祖父母の家に遊びに来た。海で泳ぎ、祖母の果樹園でスモモやリンゴを頬張った。

中学校に上がると、次第に学校が窮屈だと感じるようになった。成績は悪くはなかったが、〝みんな同じ〟であることを求められる学校に急速に魅力を感じなくなっていく。卒業する頃には、友達の影響を受けて夜の街へ繰り出し、無免許でバイクを乗り回すようになっていた。高校に進学すると、パンチパーマに鉢巻きをし、改造したバイクで爆音を上げながら走る、いわゆる暴走族の一員になった。息苦しい学校から解き放たれ、バイクで疾走するのが爽快だった。当の本人は単純にバイクが好きで喧嘩や犯罪に手を染めることはなかったのだが、母・悦子さんの心配は日に日に膨らんでいった。毎日寝ずに息子の帰りを待ち、日中も仕事が手につかなかった。そして高校1年生の冬、康智さんは学校を辞めてしまう。その後は建築現場で働きながら、夜な夜な暴走を繰り返す日々。半年ほどが経ったある日の夕方、仕事から帰ると家はガランとしていた。家財道具は半分以上消え、テーブルの上に

1.菊地康智さん。博識で、情熱的に生姜の話をする。2.陸前高田市の「奇跡の一本松」。震災前は白砂の海岸に7万本の松林が並ぶ景勝地だったが、津波で一本を残して全て流された。3.愛犬・東和と散歩をするのが毎日のリフレッシュタイム。

は1通の手紙があった。内容はよく覚えていないが、岩手に帰るというようなことが書いてあった。母が妹二人を連れて出て行ってしまったのだ。彼はまだ16歳だった。「いや、なんだよ。確かにヤンチャしてるかもしれないけど、出ていくほどか？」。母は教師だったので、教師である自分の子どもが不良になったことが恥ずかしかったのかもしれない。幼い妹への影響を心配したのかもしれない……、いずれにせよ話をしなかったので真意は分からない。恨みと疑問が渦巻いた。その日から父との二人暮らしが始まった。

わだかまり

1年後、母が交通事故で重体だという連絡が入った。脱輪した車を助けていたところ、後ろから来た車にはねられた。頸椎の脱臼骨折という大事故だった。康智さんは父に連れられて病院に駆けつけると、髪を剃り上げられ、ボルト